

二次述語構文から見る情報一致操作の必要性

山口 真史

1. 序論

本稿では、Chomsky (2000)によって提案される一致操作とは逆の関係を要求する「上方一致」の必要性について議論を行う。Chomsky (2000)では、統語構造上高い位置にある解釈不可能素性を持つ要素によってC統御される位置に対応する解釈可能素性を持つ要素が位置している場合に一致操作が行われる「一致操作 (Agree)」が提案されている。一方で、チェコ語の否定一致現象 (negative concord phenomenon) 等を説明する際に、Bjorkman and Zeijlstra (2019)等によって上方一致 (Upward Agree) が提案された。上方一致においては、Chomsky による操作とは逆の関係となった場合に一致操作が行われる。Zeijlstra 等に倣い、本稿では Chomsky によって提案される一致操作を「下方一致 (Downward Agree)」と呼ぶ。

- (1) Downward Agree (下方一致) : α enters an Agree relation with β iff
 - a. α carries at least one uninterpretable feature and β carries a matching interpretable feature;
 - b. α c-commands β ;
 - c. β is the closest goal to α . (cf. Chomsky 2000)
- (2) Upward Agree (上方一致) : α enters an Agree relation with β iff
 - a. α carries at least one uninterpretable feature and β carries a matching interpretable feature;
 - b. β c-commands α ;
 - c. β is the closest goal to α . (Bjorkman and Zeijlstra 2019: 527)

では、一下方一致と上方一致のどちらが適切に現象を説明できるのだろうか。本稿では(3)のような英語の結果構文を取り上げ、少なくとも一部の現象を説明するためには上方一致が必要であると主張する。

- (3) a. John painted the wall red. b. Mary hammered the metal flat.

2. 結果構文の統語的特性

本節では結果構文が持つ統語構造を解き明かすための統語的特性を観察する。特に、結果構文における目的語の結果状態を表す結果述語の特性に注目をする。まず、結果述語は項としての特性をもつ。英語において wh 島から要素を抜き出す場合、項と付加詞では容認性が異なり、結果述語は項と同じ容認性を示す。

- (4) a. ?Which boys_i do you wonder whether to punish t_i ?
b. *How_i do you wonder to punish these boys t_i ? (Carrier and Randall 1992: 185)
- (5) ?How flat_i do you wonder whether to punish these boys t_i ? (McNulty 1988: 196)

(4)が示すように、項と付加詞を wh 島から抜き出した場合は容認性が異なり、付加詞の場合は非文法的となる。また、(5)が示すように、結果述語 *how flat* が抜き出された場合は(4a)の項が抜き出された場合と同じ容認度を持つ。故に、結果述語は項と同じ特性を持つと考えることができる。

また、VP 削除現象を観察することで、結果述語の位置を特定することができる。Merchant (2008) によると、VP 削除現象では先行分と削除部分の態が異なっても容認される。さらに、態が v と v^* の違いに依拠するという仮定のもと、VP 削除では vP ではなく VP が削除されていると主張している。

- (6) a. This problem was to have looked into, but obviously nobody did [v^*P v^* [VP \emptyset]].
b. The janitor remove the trash whenever it is apparent that it should be [vP v [VP \emptyset]]. (Merchant 2008: 169)

結果構文の場合、結果述語を削除される要素から除くと非文法となる。故に、結果述語は VP 内に位置していると結論づけることができる。

- (7) Susan said the wall would be painted red by Bill, and he actually did. / *but he actually did blue.

次に、目的語と結果述語の間に確立される関係性について注目する。第一に、結果構文の目的語と結果述語は小節構造を持つ。1つの証拠として、小節構造を選択する動詞 *consider* に注目する。*consider* が選択する目的語と小節構造の述語が構成素を作り上げており、(8)が示すように述語と目的語の両方が用いられていない場合、非文法的となる。結果構文の場合でも、結果述語が用いられていない例は非文法的となる。

- (8) a. John considers [Mary intelligent] and [Bill foolish]. b. *John considers [Mary intelligent] and [Bill].

- (9) a. Mary washed the [the pants clean] and [the socks white]. b. *Mary washed [the pants clean] and [the socks].

第二に、目的語と結果述語における階層関係に焦点を当てる。結果構文の目的語と結果述語には階層関係があり、目的語が結果述語よりも構造上高い位置に位置している。その証拠として、(10)をあげる。

